The Japanese Association for Behavior Analysis(JABA)

日本行動分析学会　第28回年次大会　大会企画シンポジウム
(2010年10月9日・10日　神戸親和女子大学)

教育場面における子どもたちとのかかわり
行動分析学に基づく統合的サービスの可能性
Interactions with children at settings for education
:Some implications for integral services based on behaviour analysis

企画・司会: 吉野 俊彦[*1]
話題提供: 渡部 匡隆[2]・梅川 康治[3]・上村 裕章[1・4]
指定討論: 大島　剛[1]
(神戸親和女子大学[1]・横浜国立大学[2]・堺市教育センター[3]・行動・教育コンサルティング[4])
Toshihiko YOSHINO[1]; Masataka WATANABE[2], Kouji UMEKAWA[3],
Hiroaki WEMURA[1・4], Tsuyoshi OSHIMA[1]
(Kobe Shinwa Women's Univ[1], Yokohama National Univ[2],
Education Centre of Sakai City[3], Behavioral & Educational Consulting[4])
keywords: Behaviour Analysis, Controversy, Integral Services for Education

1. 行動分析学の発展

応用行動分析（Applied Behaviour Analysis: ABA）を，療育や教育に生かす活動は，行動分析学の基幹のひとつであり続けている。また，近年は本学会だけでなく，関連諸学会でも，応用行動分析に関連したシンポジウムやワークショップが盛んに行われてきた。ここ数年の本大会だけでも，藤原（2009），望月　（2008），渡部（2008），浅野（2007），嶋崎（2006），また，行動療法学会でも大対(2007)，松見(2007)に代表されるように，特別支援教育を含む，教育場面などへの行動分析学の役割について，多岐に亘る議論が重ねられてきた。

また，行動分析学に関連した書籍も多様な出版が続いており，一般の方々を含めて，とりわけ学校や福祉現場における行動分析学への関心は非常に高まっているように見える。

さらには，応用行動分析が，とりわけ自閉性障がい（Austic Spectrum Disorders: ASD）への効果のある介入法として第一に選択されるべきものと，行動分析学の有用性が英米を中心に評価されているのも改めて言及するまでもない。

2. いくつかのミッシングリンク

こうした，盛んな研究・実践や学会での議論の一方で，行動分析学が依然として，物議を醸す状態にあるのも事実である。例えば，Reed（2009)は，ASDへの介入方法としてABAが，そのような子どもたちを持つ親には非常に人気がある一方で，専門家の間では評価が分かれるとしている。わが国でも比較的一般向けに書かれているASDや発達障がいに関連する雑誌などで十分に取り上げられてはいない。例えば，そだちの科学(2008)で特集された「自閉症とこころのそだち」の「自閉症のこころにせまる」では，児童精神科臨床，家族へのアプローチと並んで取り上げられたのは，精神分析，発達臨床，心理臨床の立場であり，そこに見られるのは，プレイセラピー，コラージュ，描画といった用語である。

近年の展開を事実として評価しながらも，現状として，思いつくままに挙げれば，以下のようなリンクが欠けているように見える。サービスを必要とする・受ける側と提供者のリンク，大学を中心にしたサービスと民間サービスのリンク，行政とサービス提供者のリンク，素人と行動分析家のリンク，医師と行動分析家のリンク，行動分析家と臨床心理士のリンク，学生・療育を学ぶ者と教育者のリンクなどなど・・・。

こうしたリンクの中で，行動分析学がよりその役割を担っていくためには，行政との関わり，医師との関わり，教育現場との関わり，臨床心理士との関わり，学生を育てる大学の問題は，とりわけ重要であるように見える。

3. 本シンポジウムの目的

本シンポジウムは，こうしたミッシングリンクをつなげる，統合するためのブレインストーミングである。

まず，渡部先生には，大学や養成機関が教育現場でサービスを提供する立場として，何を問題として感じているか，その問題を改善していくためにどのような方策がとられているかをご紹介いただく。

次に，梅川先生には，行政の立場だけでなく，サービスを受ける側，また仲介する立場でもある，親や学校現場の先生方が何を問題として感じて，どのようなサービスを期待しているかをご紹介いただく。

そして上村先生には，近年盛んになりつつある，民間のサービス提供者の立場から，学校現場や家庭でサービスを提供する際に感じる問題点，またその改善策についてのご提案をいただく。

そして，指定討論として大島先生には，行動分析学でなく発達臨床の立場から，行動分析学がどのように見えて，どのような問題点を感じられるかをご指摘いただく。

一般公開とすることで，学校現場の先生方や保護者の方々にも行動分析学の現状をご理解いただくと共に，積極的に議論にご参加いただくことで，議論を深めたい。

References

浅野俊夫(企画)（2007）．エビデンスに基づいた発達障害支援の最先端 J-ABA25
松見淳子（2007）．学級の中での特別支援教育に対する行動療法の貢献. J-BTA33.
藤原義博(企画)　(2009)．授業場面における Positive Behavior Support. J-ABA27
望月昭（2008）．特別支援教育と行動分析学 J-ABA 26 招待講演
大対香奈子（2007）．神戸市『通常の学級におけるＬＤ等への特別支援事業』における現場と大学との連携～教員補助者としての学生に求められる専門性とは～ J-BTA33.
Reed, P. (2009). Behavioral Research and Interventions for Autism - New Directions. In P.Reed (Ed), *Behavioral Theories and Interventions for Autism.* New York: NOVA.
嶋崎まゆみ(企画)（2006）．学校支援において連携や協働を進めるために,『行動コンサルテーション』はいかに役に立つか-わが国への適用の現状と課題-J-ABA24
滝川一廣他(編)（2008）．特集自閉症とこころのそだち　そだちの科学, **11**, 日本評論社
渡部 匡隆(企画　(2008)．特別支援教育の現状と今後の課題：小・中学校における特別支援教育の取り組みを踏まえて J-ABA26

(文責: 吉野)

NII-Electronic Library Service